

「玄奘三蔵絵」詞書における指示語「かくて」

—和文系語彙と訓読系語彙の併用の観点から—

西 田 隆 政

1 はじめに

絵巻物「玄奘三蔵絵」全 12 巻（藤田美術館所蔵）は、鎌倉時代末期に制作されたものとされる¹。そして、その詞書の日本語史資料としての意義については、築島（1982b）に指摘がある。その用語からして「この詞書の成立は、大体鎌倉中期以後として良いかと思われる」（p.2 上段）としたうえで、「この詞書の文章は、平仮名文の中でも、最も漢文の原訓読文に近い」（p.2 下段）とある一方で、「和文的な表現に翻案した場合も少なくない」（p.3 下段）とあり、さらには「注目すべき資料であり、文学的要素さえも、相当指摘出来ると思われる」（p.4 下段）とされる。

本稿では、この詞書中に使用された、指示語「かくて」とその他の「かく」系の指示語について、検討する。「かくて」は平安時代以来和文的な文体の作品で数おおく使用されるものである。一方、「かくして」は「源氏物語」での用例が 1 例のみと和文で多用される指示語ではない。鎌倉時代以降での「かく」系指示語の用法の変化をみるうえでも、この詞書の用例は注目すべきものである。

2 指示語「かくて」の用例

「玄奘三蔵絵」は全 12 巻の長大な絵巻物であり、そこには全巻にわたって詳細な詞書が付されている。そのなかに、指示語「かくて」は、5 例みることが出来る²。すべて、文頭での使用である。

(1) さて、一人馬に任せて行き給ふに、影より外の供もなし。僅かに日の

¹ 小松（1982b）の「解説」による。

² 「玄奘三蔵絵」詞書の調査と引用は、小松（1981・1982a・1982b）『続日本絵巻大成』7～9（「玄奘三蔵絵」上～下）の島谷弘幸編「「玄奘三蔵絵」詞書釈文と「大慈恩寺三蔵法師伝古点」対照一覧」による。下線は稿者による。それぞれの所在は、巻の上中下と詞書釈文のページ数でしめす。

光を見て、東西を弁へ、屍の散れるにて、前後の道を知る。とかくして³、流沙を辿り行くに、皮の衣を着、剣を捧げたる異形の物（→者）共、数知らず先立ち見ゆるが、近付けば見えず。化け物なるべし。空に声ありて、
「恐

る事なかれ、恐るる事なかれ」と告ぐれば、頼もしくぞ思しける。斯くて八十余里を過ぎて、第一の烽に着き給ひぬ。

（巻第 2、第 2 段、上 pp.193-194）

(2) 斯くて第四の烽に赴き給ふに、王祥が曰く、「彼此の主は我が親類なり。名をば伯隴といふ。事の由を語り給はば、等閑なるべからず」となん申す。

（巻第 2、第 3 段、上 p.194）

(1) と (2) は、巻第 2 の用例である。巻第 1 の段階で、天竺への求法の旅を決意した玄奘三蔵が乗馬して一人の胡人を供として出発する。そして、巻第 2 では、旅をつづけるうちに、胡人にも逃走され、さらに、一人乗馬して屍の散乱する砂漠の道をすすむと、化物にも遭遇しそうになるが、たのもしい仏の導きでその苦難ものりこえていく。「こうして」八十余里を過ぎて、第一の烽に到着したとある。

この (1) の「かくて」は、さまざまな苦難をへて、砂漠の道をすすんできたことを指示している。そして、「八十余里」という長旅をへて、最初の烽に到着したことから、「かくて」の指示するのは、具体的に特定できる一つの事態ではなく、おおくの苦難をふくめたさまざまな事態ということになる。

(2) の「かくて」は、第 3 段の冒頭部の例である。第 2 段で、最初の烽に到着してから、その主である王祥の支援をうけ、さらに案内までされて、砂漠をすすみ、第 4 の烽に到着するまでを指示している。段の冒頭にあることからしても、この「かくて」は、第 2 段から第 3 段にいたるまでの、旅の経過を指示するものであるのが理解される。

これらの (1) と (2) からすると、「かくて」は、ともに西田 (2010)⁴での分類の B タイプに該当する。この B タイプとは、指示語の「かくて」が「後

³ 「とかくして」は、第 4 章で検討する。

⁴ 以下、「源氏物語」の「かくて」の調査は西田 (2010) による。ここでは、「源氏物語」の「かくて」を A、B、C の 3 タイプに分類する。なお、C タイプは「（「かくて」の指示する）前件の先行文脈が後件の文脈とは直接的な関係をもたない」（p.92）例で、「玄奘三蔵絵」詞書には該当する例がない。

件」と関係性をもつ先行文脈を指示する」(p.92) というものである。「特定の行為や事態を指示する」(p.92) Aタイプとは相違し、その指示対象を特定の行為や事態に限定することが困難なものでもある。そして、この傾向は、(3) (4) (5) についても同様である。

(3) 斯くて、安座の後、僧の中に年盛りに智解聡く、威儀正しき二(→二十)人を選びて、正法蔵の御前に伴ひ参り給ふ。法師、膝行肘歩して師資の礼を尽くす。諸僧坐して後、法蔵宣はく、「何れの所より、何の心ざし(→志)有りてか来れる」と。法師答へ給はく、「我は大唐国より来れり。『瑜伽論』を習ひ奉らんと思ふなり」と。法蔵啼泣して、御弟子覚賢といふ僧に宣はく、「我、年頃病悩せし事の由を、諸衆の為に説くべし」と聞ゆれば、覚賢涙を抑へて説き給ふ。(巻第6、第1段、中 p.205)

(4) 斯くて、摩竭陀国の王舎城を巡礼し給ふ。昔の君王、多く此の地を王城に占め給ひけり。四方、皆山にして、其の形、削れるが如し。(巻第6、第3段、中 p.208)

(5) 斯くて、諸論を伝授し給ふ事、『瑜伽論』三反、『順正理論』『顕揚論』『対法論』各々一反、『因明』『声明』『集量』等の論、並びに『中論』『百論』等二反、其の他、波(→婆)羅門の書、印度の梵書等、文字の起こりなどに至るまで、残る所なく、皆学し給ひければ、五か年をぞ送りける。(巻第6、第7段、中 p.210)

(3) (4) (5) は、いずれも巻第6での用例である。そして、巻あるいは段の冒頭で使用される例でもある。

巻第2以降、旅をつづける玄奘三蔵は、西域の諸国をすぎて、北天竺に到着する(巻第3、第6段)。その後、仏陀の足跡や遺跡をたずね、旅をつづける(巻第3、第7段～巻第4、第3段)。そして、高僧の在住する寺では教えをさずかり、さらに旅をつづけて、三千世界の中心たる摩竭陀(マガダ)国にいたる(巻第4、第4段～巻第5、第5段)。さらに、同国の那爛陀(ナーランダ)寺におもむき、歓待をうけるとある(巻第5、第6段)。

巻第6は、玄奘三蔵が那爛陀寺に「安座」してからの話である。(3)の巻冒頭の「かくて」は、天竺での数おおくのできごとを指示するものである。それから、玄奘三蔵は、この旅の眼目である、那爛陀寺で5年にわたる本格的な仏法の伝授をうける。「かくて」の指示する範囲は、巻冒頭にあることからしても、

それまでの天竺でのできごと全体とかがえることができる。

(4) の「かくて」は、第 1 段から第 2 段にかけて「修学を営む他は、他の謀無かりけりとなん」(第 2 段末尾、中 p.208) と、仏教の修学に集中しているという第 1 段と第 2 段を指示する例である。修学に集中してから、玄奘三蔵は摩竭陀国の王舎城を巡礼する(第 3 段～第 5 段)。さらに、その他の聖跡も数おおく巡礼して、那爛陀寺にかえり、修学をつづける(第 6 段)。

(5) の「かくて」は、巻第 6 の末尾である第 7 段の例である。巻第 6 全編における那爛陀寺での修学や摩竭陀国での聖跡巡礼等、さまざまなできごとを指示しているとかがえられる。そして、その修学をさらにすすめ、仏教の重要な諸論の伝授を何度もうけるだけでなく、それに付随する知識も、のこるところなく、まなびおえたとして、巻第 6 はとじられる。

これら 5 例の「玄奘三蔵絵」詞書の「かくて」は、いずれもが前件として、直前に記された特定の事態ではなく、それまでにおこったさまざまな事態を指示して使用されている。これは、和文の作品である「源氏物語」での「かくて」を検討した、西田(2010)での B タイプであり、前件を幅ひろくうけて、あとの物語の展開につなげる例といえる。

また、ここでの 5 例中の 4 例が巻や段の冒頭で「かくて」が使用されている。このような「かくて」は、和文作品である「宇津保物語」⁵におおくの例をみることができ、和文作品での巻相互のつながりをもたせる方法ともなっている。

これらの点からすると、「玄奘三蔵絵」詞書の「かくて」は、和文的な用法と関連しうる可能性がある。「かくて」でそれまでのいくつもの事態をうけて、それをつぎの話へとつなげていくという用法である。

つぎの 3 章では、この点をふまえて、「かくして」の用例を検討する。

3 指示語「かくして」の用例

指示語「かくして」は、3 例みることができる。「かくて」と同様に、すべて文頭での使用である。

(6) 傍らに桐樹あり。胡人、此の木を切りて、橋に渡して、法師を渡し奉り、河に沙を埋めて馬を渡す。斯くして休み臥し給ふ。

(巻第 2、第 1 段、上 p.193)

⁵ 「宇津保物語」の「かくて」については、中野(1981)を参照。

(6) の「かくして」は、胡人が三蔵と馬とを無事河をわたらせたことを指示している。そして、休養をとり、横になったとある。ここでは、「かくして」直前にある語句が指示対象となっており、「かくて」のような、いくつもの事態を指示対象とはしていない。

(7) 王、甚だ喜びて、群臣を率ゐて、迎拝讚嘆して宮に引き入れて、音楽を演べ、飲食・香花、諸々の供養を尽くして、齋戒を受けむと請ふ。斯くして、此処に一月余りを送る。(巻第 8、第 1 段、中 p.216)

(7) の「かくして」は、玄奘三蔵が鳩摩羅（クマラ）王の招請に応じた際に王が供養をつくして玄奘三蔵を歓待したことを指示している。ここでも指示対象は、(6) と同様直前に語句でしめされたもので、鳩摩羅王の歓待という特定の行為である。

(8) 別に一本を書き写して、会場の門の外に懸けて、「一字も理なくして、能く難破する者あらば請ふ。頭を切りて謝せむ」と言ふ。斯くして夕に至れども、一人も物言ふ事なし。(巻第 8、第 4 段、中 pp.220-221)

(8) の「かくして」は、玄奘三蔵が自身の「論」への理解を書にしめして、これを難破する者がいれば断頭して謝罪すると宣言したことを指示している。指示対象となるのは、玄奘三蔵が決意をこめて宣言をしたという、特定の行為であり、それは「かくして」の直前にしめされている。

これらの 3 例の「かくして」は、いずれも、「かくして」の直前にしめされた、特定の行為や事態を指示して、それをうけてなんらかの行為がなされる、というものである。これは、西田 (2010) での「特定の行為や事態を指示する」(p.92) A タイプに該当する。

ここから理解されるのは、「かくして」は、文頭で使用される点では「かくて」と同様であるものの、その指示範囲という点ではおおきな相違があることである。次章では、「かくして」の類例である、「かく」にサ行変格活用動詞「する」が接続した「かくしつ」「かくする」と「とかくして」、さらに、「ごとし」接続した「かくのごとし」、ラ行変格活用動詞「あり」の接続した「かかる」「かかれども」について、みていく。

4 「かくして」の類例

「玄奘三蔵絵」詞書には、(9) (10) の「かくしつづ」2例、(11) の「かくする」1例、前掲 (1) の「とかくして」1例、(12) の「かくのごとし」1例、(13) の「かかる」1例、(14) の「かかれども」1例をみることができる⁶。

(9) 然れども、怖るる心なく、水を踏まんとするに、石の蓮花忽ちに出で来て、足裏を受く。踏みて渡れば、足の去るに従ひて、後の蓮花は失せぬ。斯くしつづ、山の下に至れば、峰険しくして、登るに頼りなし。

(巻第1、第4段、上 p.191)

(10) 明くる日、又、像を迎へて各々来り集まる事、初めの如し。斯くしつづ十八日に至るまで、一人として論を発す者無し。

(巻第8、第5段、中 p.220)

(11) 王、侍臣に命じて、「大象を莊嚴して、法師を乗せて貴臣を従へて、衆を巡りて義を立てて、いみじき事を告げ唱へしむ」と。法師、辞して従はず。王の曰く、「西国は昔より斯くする事、論の法なり。違ふべからず」と。(巻第8、第5段、中 p.220)

(12) 「……願はくは、本国に還りて聞く所を翻訳して、有縁の輩をして、同じく聞き見る事を得しめむ」と言ふ。戒賢喜びて、「是、菩薩の心なり。我、心に望む所、又、斯くの如し。諸人、懇ろに留むべからず」と宣ふ。

(巻第7、第9段、中 pp.215-216)

(13) 其の道、雪山の中央の道に当たれり。寒く峻しき事、陵(→凌)山にも過ぎたり。雲凍り、雪飛びて、暫くも晴るる時なし。……若し衆生のために正法を求めずば、争でか父母の遺体を受けながら、斯かる所に至らましと、哀れ也。

(巻第3、第6段、上 p.201)

(14) 夜は、妖鬼、火を点して星に似たり。昼は、驚風、沙を上げて雨の如し。斯かれども、恐るる心はなし。

(巻第2、第3段、上 p.195)

上記の (9) から (12) までの6例とさきにあげた (1) の計5例では、いずれも、指示語として直前に記された特定の行為や事態を指示している。これは、

⁶ これら以外には動詞「かかり」の「かかる」1例と「かかれども」1例、「かやう」1例をみることができる。いずれも特定の行為や事態を指示する。また、

(6) から (8) にあげた「かくして」と、同様である。

具体的には、(9) では玄奘三蔵が夢のなかで池をわたろうとするとつぎつぎと石の蓮の花ができてわたりおえるときえたこと、(10) では最初と同様に像をむかえて大勢の人があつまったこと、(11) では荘厳なる大象に僧をのせて儀式をすること、(12) では玄奘三蔵が帰国して人々に仏教の教義を翻訳してつたえること、(13) では氷におおわれた寒冷の山をこえること、(14) では夜は妖怪が出現して昼は強風の砂漠であること、前掲 (1) の「とかくして」ではただ一人乗馬して屍の散乱する砂漠を旅することが、それぞれ指示対象であり、いずれも、直前にその説明がなされている。

以上の点からすると、「かくて」以外の「かく」をふくむ指示語は、すべて直前にある特定の行為や事態を指示するものであり、「かくて」だけがその指示範囲が相違するということになる。次章では、この点について、さらに検討する。

5 「玄奘三蔵絵」詞書における「かくて」の位置づけ

前述したように、「玄奘三蔵絵」詞書では、「かくて」と「かくして」等それ以外の「かく」系の指示語とでは、用法のうえで、おおきな相違があるとみることができる。「かくて」とそれ以外とでは、その指示しうる範囲に、それ以前の文脈レベルなのか、直前の語句レベルなのか、という差異があるからである。

そのなかでも、「かくて」と「かくして」にかぎっていえば、副詞のように、文中で使用する例はみられない。接続詞のように、文頭でのみ使用されるという点で、その用法は、共通している。

この点からすると、「玄奘三蔵絵」の指示語「かくて」と「かくして」は、指示副詞ではなく、文と文とを接続する接続詞にちかい用法をもつ語とかがえられる。ただし、指示範囲の面からすると、「かくて」がそれ以前の文脈レベルを指示対象とし、「かくして」が直前の特定の行為や事態を指示対象とする。要するに、ともに、文を接続する機能を有しつつも、その対象となる指示範囲に相違があるということになる。

この「かくて」と「かくして」は、用語として文体差のある可能性がある。「かくて」が「源氏物語」をはじめとする和文作品に多用されるのに対して、「かくして」の用例は極少数にかぎられる。「源氏物語」では、1例のみで、そ

れも「かくしていかなるべき御ありさまならむ」（螢、p.818）⁷という、作者の評言をしめす「草子地」⁸とされる例である。さらに、青表紙本系の「肖柏本」と河内本系諸本と別本系の「陽明家本」「阿里莫本」には「かくしつ」の異文もあり、確例とするには疑問のある例である。

一方、「かくて」は、「源氏物語」に176例（「かうて」9例をふくむ）あり、地の文、会話文、心内文、和歌のそれぞれに例があるだけでなく、文頭にも文中にも例があり、物語中で幅ひろく使用されている⁹。和文作品で多用される語である。

それに対して、訓点資料には、「かくして」の例をみることができる。築島（2007）では、「かくて」の例は掲出されないものの、「かくして」は1例掲出されている。また、「西大寺本金光明最勝王経平安初期点」にも「作是（カクシ）テ言（い）ふ応（べ）し」（p.47）の例がある¹⁰。

つぎに、「かくして」以外の指示語の例をみると、「かくして」と同様に、指示副詞「かく」にサ行変格活用動詞「す」の接続した「かくす」は、築島（2007）では、「かくしつ」と「かくする」の例もあって、8例掲出されている。（9）（10）（11）の「かくしつ」や「かくする」も漢文訓読に使用される語であるのは、あきらかであろう。

また、「かくのごとし」については、築島（2007）では、類例の「かくのごときあり」、「かくのごときなり」、「かくのごとくあり」、「かくのごとくす」、「かくのごとくなり」をふくめ、多数の例が掲出されており、漢文訓読で多用される語であるのはあきらかである。さらに、築島（1963）では「和文では普通「カクノゴトシ」は用ゐない」（p.635）と指摘されている。

それに対して、「とかくして」と「かかる」「かかれども」等の動詞「かかり」は和文で使用される。「源氏物語」では副詞「とかく」は80例で「とかくして」は3例（「とかうして」1例をふくむ）、「かかり」は非常におおく687例みることができる。しかし、築島（2007・2008）では副詞「とかく」も動詞「かかり」も掲出されていない。これらは、和文での使用語彙といえそうである。

7 「源氏物語」の用例と異文の調査は池田（1953～1961）による。濁点と下線は稿者が付した。

8 榎本（1982）p.68を参照。古注釈の「弄花抄」以来、「作者」や「作者の詞」や「草子地」の指摘がある。

9 西田（2010）の調査による。

10 春日政治（1942）による。

以上検討してきた点からすると、「玄奘三蔵絵」では、「かく」系の指示語のなかで、「かくて」だけが、特異な存在として位置づけられる。すでに、築島（1982b）で、この作品には和文と訓読の両系統の語彙や語法がみられることが指摘されているが、「かくて」は、その具体的な運用の例ともかんがえられる。

「かくて」は、それ以前の話の流れをうけて、つぎの話を展開させるときに使用する。一方、それ以外の「かく」系の指示語は、直前にしめされた行為や事態をうけて、つぎになされる行為や事態をのべるときに使用する。

ただし、「とかくして」や動詞「かかり」については、訓読語彙ではなく和文語彙であるが、これらは、和文作品のなかにおいても、「かくて」のような以前の文脈を指示する用法はなく、その点では、和文の用法を踏襲しているとみることができる。

「玄奘三蔵絵」詞書において、「かく」系の指示語がそれぞれ和文系と訓読系の語であることが、意識されているのかどうかは、現時点では明確にできない。しかし、すくなくとも、「かくて」については、和文系の作品にみられる、巻や段の冒頭で使用する用法を踏襲している点からすると、それにつらなるものと理解することはできるであろう。

すでに、築島（1982b）では、和文的な語彙・語法の例として、「いづちともなく」や係助詞「ぞ」「なむ」による係り結び、終助詞「かし」、文末の係助詞「なむ」、「おはします」「のたまはす」のような最高敬語の使用等を指摘している。本稿でみた、「かくて」も、その一例とかんがえられる。

「かくして」等については、漢文訓読で使用されることはあきらかであるものの、その用法上の関連があるのかどうかは、不明な点がおおい¹¹。この点については、さらなる検討が必要である。

5 おわりに

指示語「かくて」は、鎌倉時代の和漢混交文の作品である「平家物語」ではその使用例が減少し、その用法も平安時代の和文よりもせまいものとなっていることが指摘されている¹²。「玄奘三蔵絵」は鎌倉後期の成立とされるが、その

¹¹ 『日本国語大辞典』第2版の「かくして」の項目では、さきの「西大寺本金光明最勝王経平安初期点」の「かくして」を「接続詞」のようにもちいた例として掲出している。

¹² 岡崎（2011）では、覚一本「平家物語」にはいわゆる「転換」の「かくて」の例もなくなり、用例も減少していることが指摘されている。

詞書が文体的な面で和文からの用法を踏襲している点があり、注意される。

今後、日本語史の資料として、その性格をあきらかにしたうえで、活用される可能性が大である。この時代のほかの絵巻物詞書との関連もふくめ、日本語史研究の立場からの、検討が期待される。

[参考文献]

池田亀鑑(1953～1956)『源氏物語大成』1～8 中央公論社。調査・引用は第9版(1980)による。

榎本正純(1982)『源氏物語の草子地 諸注と研究』笠間書院。

岡崎友子(2010)『日本語指示詞の史的研究』ひつじ書房。

岡崎友子(2011)「指示詞系接続語の歴史的研究—中古の「カクテ・サテ」を中心に—」(青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版)。

春日政治(1942)『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』岩波書店。

引用は春日政治(1985)『春日政治著作集 別巻』(勉誠社)による。

小松茂美編(1981)『続日本絵巻大成』7「玄奘三蔵絵」上 中央公論社。

小松茂美編(1982a)『続日本絵巻大成』8「玄奘三蔵絵」中 中央公論社。

小松茂美編(1982b)『続日本絵巻大成』9「玄奘三蔵絵」下 中央公論社。

築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会。

築島裕(1981)「『大慈恩寺三蔵法師伝』の古写本」(『続日本絵巻大成』7 月報4、中央公論社)。

築島裕(1982a)「玄奘三蔵についての古文献」(『続日本絵巻大成』8 月報5、中央公論社)。

築島裕(1982b)「『玄奘三蔵絵』詞書と国語史」(『続日本絵巻大成』9 月報6、中央公論社)。

築島裕(2007)『訓点語彙集成』2 汲古書院。

築島裕(2008)『訓点語彙集成』5 汲古書院。

中野幸一(1981)『うつほ物語の研究』武蔵野書院。

奈良国立博物館・朝日新聞社編(2011)『天竺へ 三蔵法師3万キロの旅』奈良国立博物館・朝日新聞。

西田隆政(2010)「源氏物語の地の文における指示語「かくて」の用法について—「転

換」の用法の問題を中心に一」（森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』
8 三弥井書店）。